

54. 民間の単科精神科病院における思春期入院患者の動向 ～五稜会病院での17歳のカルテ～

中島公博、貴志昌矢、田上洋平、秋野直子、山口 択、富永英俊、千丈雅徳

【はじめに】

五稜会病院（以下当院）は193床の単科精神科病院である。2020年1月、我が国で新型コロナの初感染が判明して以来、新型コロナ禍による学校の休校や再開に伴っての変化に適応出来なかったり、オンライン授業等、リアルな人間関係が構築出来ずに病んで受診する患者が増えている。今回、新型コロナによる閉塞された中で10代思春期入院患者がどのような影響を受けているかを検討した。

【10代入院者の動向】

病院全体の年度別の10代入院者は、2012年：46

人（全体入院の7.8%）、2017年：84人（12.0%）、2020年：89人（12.3%）、2021年：131人（18.8%）で年々増加していた（図1）。ある年度の6月30日時点でのストレスケア思春期病棟に在院していた10代思春期入院患者数は、2017年：5人、2020年：5人、2021年は11人であった（図2）。2021年の10代思春期入院患者の入院契機は、コロナ禍の影響によって学校の環境変化もあるが、それよりは母子間葛藤が多かった。

筆者が、2022年2月の時点で担当していた10代思春期入院患者は12人であった（表）。男2人、女10人、平均年齢は16.5歳、中学生が2人、10人



図1 年度別10代思春期入院患者数の推移

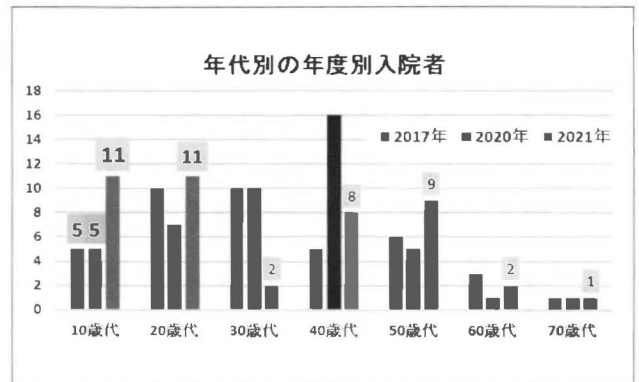


図2 ストレスケア思春期病棟、年代別の年度別入院者数

表 筆者が担当したある時点での10代思春期入院症例

No	年齢	性別	診断	主訴	入院目的、備考	コロナの影響
1	14	女	F92	不安・落ち込み・幻聴	対人関係の向上、自宅から離れる	△
2	15	女	F43	不安・継父の性的虐待	衝動行為をしないこと、児相の一時預かり	×
3	15	女	F92	SNSに影響された情動不穏	被害関係妄想の改善、児相の一時預かり	×
4	16	男	F42	先端恐怖、不登校、ゲーム依存	強迫症状の改善、規則正しい生活	×
5	17	女	F84	落ち込み、不安、自殺企図	対人関係の向上、規則正しい生活	×
6	17	女	F41	気分が落ち込む、家の居心地が悪い	気分の安定化、母の交際者・自宅から離れる	×
7	17	女	F41	不登校、腹痛、希死念慮・自傷行為	気分の安定化、規則正しい生活をする	×
8	17	女	F92	気持ちが落ち込む、不安感	気分の安定化、自宅から離れる	×
9	17	女	F41	気分の落ち込み、不安感、希死念慮	自宅から離れる、母の性的虐待、児相の一時預かり	×
10	17	女	F41	気分の落ち込み、不安感	親と距離を置きたい。援助交際	×
11	18	女	F41	起きれない、気分の浮き沈み	生活習慣を替える、気分の安定化、妊娠中絶	×
12	18	男	F43	落ち込み、不安感、集中出来ない	不安抑うつ気分の改善、自宅から離れる、盗撮、退学	×

は高校生であり、17歳女子高生が6人と半数を占めていた。12人のうち兇相の一時預かりが3人、親、自宅から離れたいと希望したのが5人、気分の安定化を図るが5人、規則正しい生活をするが4人である。コロナ禍の影響の有無では、大きく影響していた患者は少なかった。

【ストレスケア思春期病棟における10代思春期向けのプログラム】

10代思春期入院患者に対しては、成人期とは別個のプログラム「Peer's」を用意している。生活リズムを整えたり、朝から活動するための「モーニングタイム」、このプログラムは同世代の子と顔を合わせることで交流のきっかけになる。勉強の場の確保や学習習慣をつける「学習タイム」。「ぴあーずトーク」は、自分を知ること、気持ちに気づくこと、考えや行動を見直すこと、相手をよく観察すること、情報を整理すること、相手に合わせて話すことなどのソーシャルスキルについて学ぶ。同世代の子とスポーツを通じて交流する「ぴあーずスポーツ」は、身体を動かし気分転換や体力づくりのためのプログラムである。思春期患者に対しては、受持ち看護師・思春期チームスタッフが、症状や家族・友人関係・進路や将来のことなど、様々な悩みを丁寧に伺い状況の整理を一緒に行っている。

【事例1】

17歳男子高校生。コロナ禍で休校、再開、行事もないなかで同級生と親密な関係が作れない。食思不振、意欲低下が顕著となり入院治療を行った。主訴は、下肢のむずむず、違和感である。X年4月、下肢のむずむず、違和感、いてもたってもいられない症状があり、内科、脳外科、神経内科を受診し、精査するも特記すべき異常はなかった。精神科受診を勧められて、5月、当院を受診した。下肢の症状が強く、不安感、希死念慮があることから、6月、当院ストレスケア思春期病棟に任意入院となった。入院目的は、下肢のむずむず、違和感の改善、精神症状の安定化である。入院後、規則正しい生活をしてもらい、作業療法・運動療法を促した。抗パーキンソン剤、クロナゼパム、抗不安薬等の薬物療法は効果がなかった。公認心理師が関わり、生活の見直しを行った結果、朝食前の過度な運動をしているのが判明した。朝食前の診察時にも著明な発汗が認められていた。朝の生活習慣の改善により、下肢の症状の改善がみられ

自宅退院となった。

【仮想事例2】

17歳女子高校生。主訴は、気分の落ち込み、不安・焦燥感、死にたくなるであった。2人同胞第1子で、両親は離婚し、母と同居している。妹も情緒不安定で通院治療を行っている。X-1年、高校入学後、友人からの嫌がらせやSNSでの悪口があり、10月にはリストカットや大量服薬を繰り返した。X年6月、クローゼットで縊首未遂し、その後も自殺の道具を購入するなどがあり、7月、精神科クリニックの紹介で当院を受診し、ストレスケア思春期病棟に任意入院となった。入院目的は、自宅から離れる、規則正しい生活をする事である。入院後、看護師に母との確執や母からの性的虐待を吐露した。児童相談所と協議し、自宅には帰れないために児童相談所の一時預かりとなった。対症療法としての薬物と患者に寄り添った援助、母との調整を行った。

【考察】

五稜会病院に入院した10代思春期患者数を年度別に比較した結果、10代の入院患者数は、年々増加していた。10代患者は、学習空白期間の不安、進級・卒業の心配、生活の乱れ、親との関係性などの悩みを抱えていることが多い^{1,2)}。そのため、10代用の専門プログラムの必要性が高い。新型コロナ禍で、学校の休校再開に伴って精神的不調を来している学生やオンライン授業等、リアルな人間関係が構築出来ずに病んで受診する例が増えている。しかし、10代思春期入院患者において、新型コロナ禍が大きく影響しているのは少なかった。

【まとめ】

五稜会病院における10代思春期入院患者の動向を検討した。入院患者数は年々増えており、進級・卒業の不安、不規則な生活、親との関係の問題を抱えていることが多い。入院患者に限っては、新型コロナ禍による精神的影響は少なかった。開示すべきCOIはない。

【文献】

- (1) 中島公博：民間の単科精神科病院における思春期入院治療の現状。札幌市医師会医学会誌：34, 2009
- (2) 中島公博：民間の精神科病院における退院困難な思春期症例の検討。札幌市医師会医学会誌：39, 2015